

## 「選択できること」を謳歌する サウジアラビアの女性たち

(独) 日本貿易振興機構 (ジェトロ)

ビジネス展開・人材支援部 新興国ビジネス開発課 課長代理 柴田 美穂



サウジアラビア政府が推し進める国家改革「ビジョン2030」の下で、サウジアラビアの社会変化が急速に進んでいる。「ビジョン2030」は、石油部門に依存しない経済の多角化や、民間部門のGDPへの貢献拡大、デジタルインフラ整備、国民の健康増進、文化・娯楽の拡充など多岐にわたっており、政府は必ずしも社会改革のみに焦点を当ててきたわけではない。しかし、筆者がリヤドに滞在した約4年で最も変化を実感したのが、生活様式の大きな変化であった。日常生活に影響があった部分のみを挙げても、映画館のオープンや音楽イベント開催など各種エンターテインメントの機会増加、飲食店内の席に男女の仕切りがなくなったこと、礼拝時の店舗閉鎖が必須でなくなったことなど多くの点があげられる。このような大きな社会変化を背景に、当事者である若年層、特に都市部の女性たちは、これまで制限されてきた選択の自由を謳歌し始めている。

### 日々の生活様式が激変

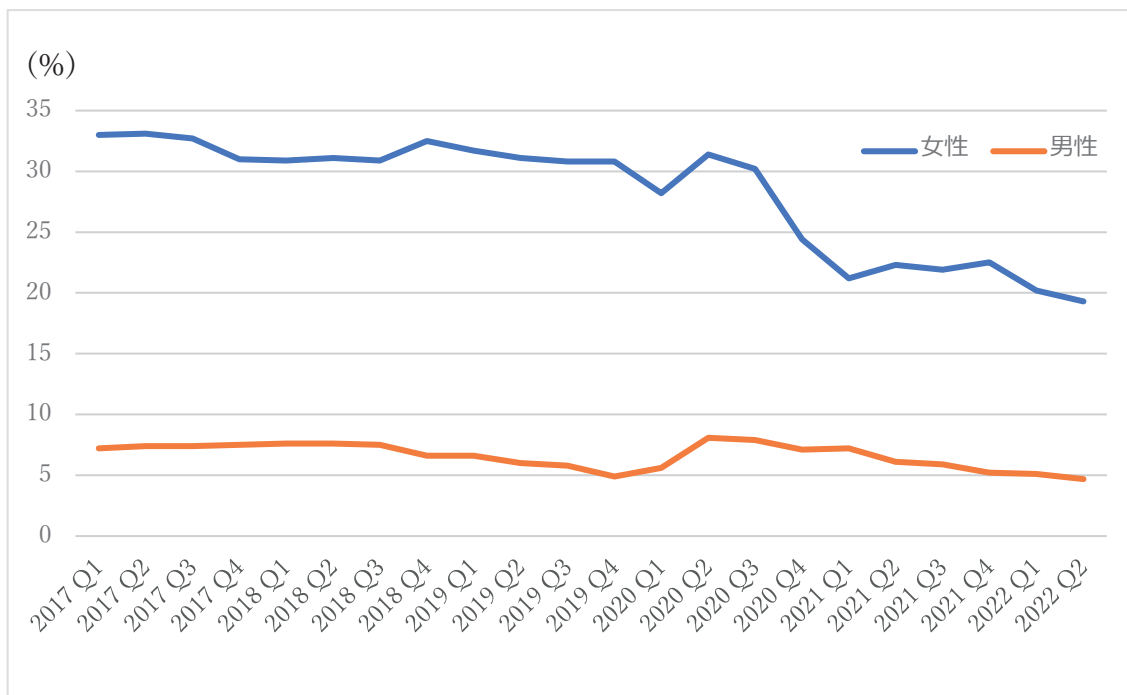
—ショッピングモールの中を行き交う女性は、体全体を覆うアバーヤと呼ばれる外套を着てはいるものの、そのアバーヤの色柄やデザイン、素材等は個人の好みに応じて異なっておりファッショナブルだ。心地よい音楽が流れる市内の米系コーヒーチェーンでは、コーヒーを片手にPCで作業する「おひとり様」の女性客がいるかと思えば、オープンカフェでは、女性グループが談笑しているのが車通りからでも見ることができる。映画館は話題のハリウッド映画を楽しむ客で満席だ。—これは、リヤド市内のごく普通の日常生活の風景である。他国から見ると当たり前のこうした光景は、サウジアラビアではほんの数年前まではいずれも見られなかったことばかりだ。

改革前は規律を取り締まる宗教警察の存在もあってか、特に保守的な傾向が強い首都リヤドでは、例えば、女性が着用するアバーヤはシンプルなデザインで黒一色であった。飲食店の入り口や内部の座席も男女別に分かれ、店内のBGMはなく、周囲の人々の話し声が聞こえてくるだけであった。また、病院、政府機関や一部の企業を除いては女性が働く場所は限定的で、かつてのサウジアラビアを知る駐在員によると、街で女性を見かけること自体がほとんどなかったという。サウジアラビアでは、公立大学が無償であることもあ

り、元来女性の大学進学率は高いのだが、女性が働く場が極端に限定されていたためだ。

それが、政府の進めるサウジアラビア人雇用政策（サウダイゼーション）により、サウジアラビア人に限定した職種が拡大されてきたことに伴って女性の社会進出が一気に進んだ。特に、女性用下着、化粧品、ケーキ・チョコレートなどの特定の小売り分野はサウジアラビア人女性に限定された職種だ。大型スーパーマーケットに行くと、女性のレジ係が対応する列が半分程度を占めるようになり、街中でサウジアラビア人女性と接する場面が一気に拡大した。サウジアラビア総合統計庁によると、女性の失業率は引き続き男性よりも高い水準に留まっているものの、大きな改善を見せていることがわかる。女性の就労事例は、今や民間航空機パイロットや国軍にまで拡大しており、女性の活躍の場が増えていく変化のスピードは非常に速い。

サウジアラビア人の失業率推移



出所：サウジアラビア総合統計局からジェトロ作成

## ジェンダーギャップ指数も大きく改善

また、女性の権利も拡大した。最も話題に上ったのが2018年6月に解禁された自動車の運転免許取得であろう。当初は、周囲の女性たちに話を聞いてみても様子見をしているケースが多かった。しかし、その後、留学等の理由により海外で運転を経験したことがある女性を皮切りに徐々にその数は増加し、今では市内で女性ドライバーを見ない日はなくなった。2019年8月には「庇護者」と呼ばれる男性親族の許可なしにパスポート取得ならびに海外渡航も可能となり、2021年6月には「庇護者」の許可なしで未婚の女性が一人暮らしできるようになった。こうした変化も後押ししてか、地方出身だが仕事の都合でリヤドで

単身生活しているという女性に出会う機会も多く、市内には入居者を女性に限定したアパートも見られるようになった。



市内の女性入居者専用のアパート（左） 飲食店の男性用入り口の名残（右）

女性の視点から見ると、サウジアラビアで進む規制緩和は、これまで画一的であった女性たちの生活様式・行動様式に選択肢を与えた、ということである。運転したい女性は運転し、黒以外のアバーヤを着用したい女性はそのような出で立ちをし、ニカーブ（目以外を覆う布）ではなくヒジャーブ（スカーフ）を着用したい女性はそのようなスタイルを楽しむ。そして、仕事で海外出張の機会があれば、男性と対等にその手配と業務をこなすことができるようになったのだ。リヤド市内では、それでも黒いアバーヤとニカーブを着用している女性を多く見かけるし、運転はしないという女性にも多く出会う。しかし、それは自らが「ニカーブを着用する」、「運転はしない」ということを選択・決断しているのであって、他者から決められているのではない、ということに大きな意味がある。勿論、配偶者や親の方針に従わざるを得ない女性もいる。しかし、世界経済フォーラムが発表しているジェンダーギャップ指数のランキングをみると、サウジアラビアは2020年の146位から2022年には127位に大きくランクアップするなど、過去数年で大きく変わった様子が見て取れる。ちなみに日本の2022年のランキングは116位だ。

### 経済的自立と進む価値観の多様化

このように、サウジアラビアでも都市部を中心に女性の社会進出が進み、経済的に自立する女性が増えてきたことに伴い、価値観の多様化も急速に進んでいる。最近、筆者の周

囲の20代から30代のサウジアラビア人女性たちから耳にしたのが、「卵子凍結」というワードだ。彼女らはいずれもフルタイムの職に就いており、キャリアアップを目的とした転職にも積極的な「バリキャリア」の女性たちばかりだ。また、気が付けば、ほとんどが私有車で運転をし始めている。彼女らはまさに、サウジアラビアの社会変革の下で、自らが好む道を選んできた女性たちといえる。こうした女性はいずれも海外滞在経験があり英語も堪能で、就職やキャリアアップに積極的な大都市圏の出身者ばかりだ。地方都市にはまだ保守的な部分が色濃く残っており、彼女たちのような大都市の一部の女性たちの行動をもって、サウジアラビア人女性全体の傾向を語ることはできない。しかし、キャリアアップを重ねて自分自身の能力の市場価値が高まり、まだ結婚には踏みきれないが、将来的に出産はしたい、という女性の間で、卵子凍結という新たな選択が浮上しているのだ。日本でも女性の社会進出に伴って価値観が多様化したことで、それが未婚、晩婚、晩産など女性の多様な生き方につながっているとされる。サウジアラビアでも結婚、出産などはセンシティブな話題であり、大っぴらに議論されることはないのだが、こうしたセンシティブな領域においても社会改革のスピードに呼応していることには驚かされる。「ビジョン2030」の下での社会変革は、今後も多様な選択肢と価値観をサウジアラビア人女性たちに与えていくことが予想される。改革まっただ中のリヤドで筆者が目にしたのは、急速に開かれつつある社会の中で、女性たちが自分の国に誇りを持ち、進みたい道を自ら選択しつつ、社会変化を生き活きと謳歌する姿であった。

(写真は全て筆者撮影)